

「第2回なるほど栗山学」 講演要旨 講師 / 高橋 慎氏

2月26日(月) 18:30~21:00 「まちの自然財産と教育について」



導入(阿部司会者より)

本講座は、栗山型の「寺小屋」であり、松下村塾の様なものです。立場や年代を越えて、単なる学びだけではなく、参加の町民の皆さんが、相互に「つっこんだ議論」をする場です。

従来の壁を取っ払った議論を本日もお願いします。

講演にあたって

私は栗山町に来て21年目、現在、学校事務職員として継立中学校に勤めています。昭和60年から8年間、栗山小学校に赴任し勤めていた時に、先生達と共に理科の副読本をつくるということで取り組みました。当時から、社会科の副読本は全国的にもありましたが、理科の副読本は、道南の北檜山が最初で、その次に栗山町、名寄市、夕張市と続いて結果的に最後となりました。なぜかという、地学、植物、気象などは専門的な人材が多いのですが、動物分野はいないからです。当時、角田小学校に久保先生という方がいて、動物分野の知識にも長けた方で、一緒に動物編をつくりました。その方が、昨年、継立中学校の校長として赴任されました。定年までの2年の最後の仕事として、私たちは、「ホタルをたくさん飛ばすこと」、「栗山産のクワガタを育てること」に取り組んでいます。

現在、校内で約2,000匹のホタルを育てています。クワガタの方は、町内の椎茸栽培をしている農家から、ホダ木をもらってきて幼虫から育てています。2年後には、私が引き継ぐことになるかと思っています。最近、クワガタ取りは、子供たちではなく、お父さんとお母さんが取りに来る様になっています。私は、子どもたちがハサンベツ地区に行って、榆の木があればクワガタが樹液を吸っている、という環境にしたいと考えています。

本日は約1時間位で、私が関わってきた地域づくりの一つの取り組みをご紹介します。

オオムラサキの発見から「栗山オオムラサキの会発足」へ

私は、栗山町に住んでその最初の年(昭和60年)の夏に、オオムラサキを発見しました。そして、その翌年に「オオムラサキの会」が発足して以来、20年間ずっと活動が続いて来ました。物事を始める時点では、積極的に表に出るが長続きはしない、そんな町の取り組みが多いと思います。ではなぜ、私たちの会が20年間やって来られたのでしょうか。実は、会員の中で、蝶のことを研究したいという人は私しかいません。その私も専門家ではありません。普通の研究者であれば、栗山で何かを発見した場合、また新たな発見を求めて町を離れ、栗山は過去の存在として忘れられてしまいます。そして、同じ自然分野の中でも、仲違いが多いのが他の街で一般的に見られます。しかし、栗山町の自然環境グループは皆、町のことを調べ、楽しみ、そして町に還元して行こうと考える人たちばかりです。共に自然をいつくしみ、楽しむ仲間を一人でも増やし、次代の子供たちに繋げて行くことを念頭にしているためです。これはきわめて重要なことであり、長く続く秘訣であると思います。

オオムラサキの生息環境としては、御大師山は貧弱です。そこで、オオムラサキの食樹である、エゾエノキの里親運動の取り組みが、多くの町民の参加により行われました。全国発信された運動でしたが、もし、エゾエノキが多くあって、オオムラサキが多く生息していたら、そんな運動は起こりませんでした。また、その蝶がオオムラサキであったということも重要です。エゾエノキの場合、50年、100年経って、やっと世代交代できる森になります。オオムラサキの森づくりは、100年スパンで考えるべきことなのです。そのことも長く活動している要因となりました。さらに、単にエゾエノキの植生があればよい訳ではなく、周りに豊かな雑木林の環境が必要であり、生態系も必要です。その事が、オオムラサキの会が、様々な町内の団体と連携して活動することにも繋がって来ました。

(2007.3.31 北海道栗山町まちづくり推進課)

オオムラサキの会「ふれあいトーク」の取り組み (P71-参照)

高林さんという2代目会長の発案により、「心に木を植える小講演会」として、オオムラサキの会が取り組んでいる「ふれあいトーク」があります。今までに55回実施してきましたが、今日参加の皆さんの中にも、講師としてお話しただいた方がいます。オオムラサキの会は、会費が3,000円で、会員は約30人がピークでしたので、年間9万円程しか予算がありませんでした。当時、初めてのことでしたが、この「ふれあいトーク」事業は、300円の資料代を取ってを運営してきました。私たちもその分を返そうと、しっかりと資料を用意したり、テーマに合った料理を振る舞ったりと、参加者が楽しめるように工夫をしてきました。講師は、基本的に地元の人に頼み、謝礼は居酒屋で御礼をして終わり、という約束事で進められてきました。過去にお話された方々も、今さらに、バージョンアップしているかもしれません。小林酒造企画室長の小林精志さんの様に、この「ふれあいトーク」がきっかけで、以降、毎月、来客者にトークを行っているという、新たな事業が企画されたケースもありました。



栗山町の宝物を探し、次世代に伝える - 「オオムラサキ通信」などの取り組み

昭和61年8月に第1号を発行し、現在、102号まで発行している。単純に100号発行として考えても、この20年間で100回イベントや事業に取り組んできたこととなります。この通信は、報告事項ではなく案内記事がほとんどです。町の広報誌にチラシとして折り込んでもらったこともありましたが、基本的には北海道新聞の新聞折込です。これは、販売所のご好意により、ボランティア協力をいただいています。発行当時の坂井さんから始まり、佐藤さん、今井さんと道新販売所がずっと協力してくれています。

また、他にも、いきものの里推進協議会のメンバーが中心となり、栗山町の動植物の写真でつくられた「ふるさとカレンダー」も毎年作成しています。500円で販売していますが、町外の方への土産などで買ってくれており、何とか今日まで継続している事業です。中には、現在、既に失われた貴重な風景の写真もあります。撮影者の名前を残すことで、皆さんが無償提供していただいています。現在はIT化の時代であり、町の風景をデータベース化して、蓄積して残していくことが必要であると思っています。また、「いきものの里のなかまたち」(報告書)という冊子もつくり、町内の様々な自然関係の団体が、学術的にも価値のあるデータを整理して蓄積しています。こういったしっかりとした基礎資料が、何事も取り組みを進めるときに必要となります。この様な取り組みの一つひとつが、後世に歴史を残すことになり、次世代の子供たちに残していくことになると考えます。

「町の宝物」を残していけるかどうか、それは役場だけで出来ることや、責任ではありません。町民としても何が出来るかを考えることが重要です。私は転勤で色々な町を見てきましたが、栗山町にはそういったことに労苦をいとわない人材がたくさんいると思います。町の宝物は町民が守っていくものです。

栗山町の自然の特徴(1) 多様な樹林帯が関係する地域

なぜ栗山町にオオムラサキが生息しているのかを考えてみましょう。(図-1)は、冷温帯林から寒帯へ向かうところの樹林帯の記号です。「A」はブナなどの北限、「B」はトチノキやエゾエノキなどの北限、「C」は多雪地帯のユズリハなどの樹林帯、「D」はカシワ、コナラなどの太平洋側の樹林帯。

栗山町の場合は、B~Fの多様な要素の樹林帯が重なりあっている地域であるということが分かります。そして、エゾエノキの植生の北限地域であることも分かり、オオムラサキの生息発見へとつながりました。



(2007.3.31 北海道栗山町まちづくり推進課)

栗山町の自然の特徴(2) 昆虫の分布の接点

蝶の生息を調べましたが、(図 2)のとおり、栗山町はオオムラサキなどの南方種と、ヒメギフチョウなどの北方種の分布ラインであることが分かります。93種の蝶の生息を確認しましたが、実は、北海道で最も蝶の生息種類が多い地域であることが分かります。このことは、多様な植物の生育と無関係ではありません。



栗山町の自然の特徴(3) 淡水魚の分布の接点

(図 - 3)の石狩低地線が重要であり、淡水魚の分布ラインになっています。現在では、人為的な移動がありますが、例えば、エゾホトケドジョウなどの北方種の南限となっています。



栗山町の自然の特徴(4) 渡り鳥のルートに

(図 - 4)にある様に、ハクチョウやマガンなどの渡り鳥のルートであること以外に、御大師山と馬追丘陵を渡って、小さな鳥たちが、樹木や草の種をたべて運んでいます。鳥はたくさん食べると飛べないので、少し食べてすぐに糞をします。その行動により、種に傷がつき発芽するのです。

そんな鳥の生態の関係も栗山町の植生を豊かにしてきたことの要因となっています。



栗山町の自然の特徴(5) 地形的な特徴

この地域は、(図 - 5)の様に、南側を除いて山々に囲まれた地域です。風の流れが止まるという地形的な要因もあります。栗山と比較して、由仁町三川や苫小牧地区は稲作に適していません。それは千島海流(寒流)の関係があり、南側から春先5月頃まで冷たい風が吹くためです。苫小牧や室蘭など、栗山より南側の地域で昔は米が取れませんでした。

そのことから、泉麟太郎翁と同志たちは土地を求めて栗山に来たという理由が分かります。宮城県角田市には、斗蔵山と四方山があり、正に御大師山と馬追丘陵と似ています。さらに、流れている夕張川と阿武隈川とを重ねて、故郷に思いを馳せ、この栗山の土地に入植したのではと推測しています。



栗山町の自然の特徴(6) 地史からの要因

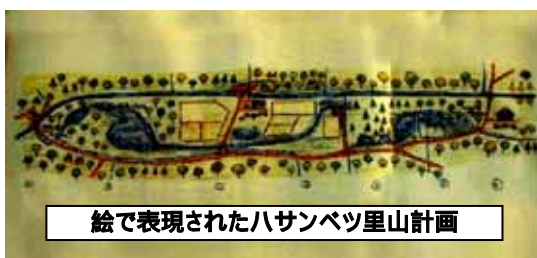
栗山を含めて、次ページの(図 - 6)に示される低地帯は、何度も海進、海退を繰り返してきました。縄文時代の5000年前頃には海であり、日本海と太平洋が繋がっていた歴史があります。その後、次第に地球が寒くなってきて約3000年前に農耕文化をもった弥生人が南から入ってきました。そのため、

もしかしたら栗山町の「栗」と、青森県三内円山の縄文遺跡の「栗」の遺伝子は一緒かもしれません。鳥が持ってきたのか、または人が。私は人為的な可能性も考えています。

「ハサンベツ里山計画」について

当時、役場農政課が主体となって、沢地の離農跡地をどうするかという、道事業の検討がありました。その時に「オオムラサキの舞うファール森からハサンベツへ」という報告書が出され、私たちにも提言があり、一緒に議論してきました。現在、農業地帯は広い所に移っており、ハサンベツ地区の様な沢地の田んぼ地帯は離農地で荒地になっていることが問題ともなっています。そこで、町との協議の結果、24hのハサンベツの離農跡地がふるさとの自然財産として購入される運びとなりました。その活用については、当時、「農業放棄地再活性化事業について」という事業名称でしたが、それでは誰も町民は来たくはなりません。その企画段階から、1年半ほどの長い時間をかけてじっくり議論をしました。通常、行政の仕事というのは単年度の予算の関係から、物事を性急に決めてしまい、結果として住民不在の場合も多く、選択を誤る場合もあると思います。しかし、このハサンベツ地区活用の取り組みでは当初から、十分な議論を交わされてきたことが、重要な要素の一つであったと思います。

その離農地の活用を考えた時、当時の自然保護というのは、人間の入らないありのままの状態にしておこうということが一般的でした。これは、かつて森を完全に失うことを経験したヨーロッパや、アメリカの自然保護思想です。それは、人間が上から見て規制して自然を保護するというキリスト教的な視点でもあります。しかし、日本では森をつくりながら共に暮らしていく、という思想や文化が育まれてきたはずで、日本全体で言えば、ヨーロッパ的な思想を取り入れてきて、「開発」か「保護」かという時代がありました。それも一つの役割を果たしてきたと思いますが、この取り組みにおける私たちの着目したことは、戦後、ハサンベツ地区には18個の農家が生活し、子供を育み歴史をつないできたことです。そして、ハサンベツ出身の方が町内にまだ多く住まわれているということもありました。その視点から、その一部でも復元することを目指しました。それで、あえて北海道にはなじみの少ない「里山」という言葉を用いて活動を始めました。



「ハサンベツ里山計画実行委員会」の発足へ

平成13年に実行委員会を組織しましたが、当時、規約をつくる時には出来るだけ短くしようと、今までにない分かりやすいものをつくりました。そして、会の方向性としては、「第4セクター」で運営という話になりました。良く「第4セクター」とは何かと聞かれますが、単純に言うと、原則として町民自らの手で取り組んで行こうというものです。ただ、当然、町にも、土地を借りたり、法律的問題の整理などの役割を担ってもらいます。計画や実行は自分たちで行う、そのために知恵・資材・労力を自分たちで生み出し、持ち寄って活動しようというものです。それが、そのまま会員の条件でしたが、今後は、「ただ見に来てくれ、そこでホッとしたり楽しんでいく人」も会員になってもらうことを考えています。行政からは、基本的に金銭的支援を受けるのではなく、河川法や都市計画法など法的問題の整理と、住民間の調整などをお願いしようというものでした。

(図 6)地史からの要因



取り組みを始める前は、ハンノキとオオアワダチソウ、ヤナギ、ヨシが生い茂る荒地になっていました。そして、活動の最初はゴミの不法投棄の処理から、行政と協力しながら始めました。そして、その里山計画(離農地再生計画)は文章にしても分かりづらいということで、絵にすることでイメージを表現しました。

(2007.3.31 北海道栗山町まちづくり推進課)

具体的計画案づくり「童謡のみえる里山づくり」

「春の小川はサラサラ」プロジェクトでは、2kmに渡る小川をつくりました。「夕焼け小焼けの赤とんぼ」プロジェクトでは、居なくなりつつあった、ナツアカネというトンボがハサンベツ地区に若干戻ってきています。その他にも、ハサンベツ地区にはたくさんのトンボたちが帰ってきています。アキアカネやノシメトンボは、町の中でも良く見るトンボだと思いますが、この2種類は田んぼの施業に合った生態であるため現在も残っています。

余談ですが、ほとんどの童謡は本州のどこかを題材にしたものです。しかし、この「赤とんぼ」という童謡の一部は北海道で書かれたものであるということです。作詞者である三木露風は、兵庫県の龍野地域出身ですが、この詩はトピスト修道院の先生をしていた頃、函館で書いたものであるということです。ある方の調査報告により、この曲にある「止まっているよ竿の先」という歌詞は、本州の通称「精霊トンボ」というウスバキトンボではなく、露風が上磯に住んでいた大正9年11月のある日の午後4時に、ある教室の窓から、竿の先の「アキアカネ」を見て作詞したと調査した方がいます。「ゴトゴト水車」プロジェクトでは、水車をつくりましたが、先日、仲間に指摘されましたが「コトコトコットン」の間違いです。



計画案の実行

まず、「田んぼを復元」しました。最初は2枚でしたが、私は「これは田んぼでない日だ、『田』という字から、4枚なければ『田んぼ』ではない」と話しました。皆が笑って協力してくれました。町内の子供たちがそこで田んぼをつくる時のことを考え、4枚に増やしました。このように会員で話し合い楽しみながら活動を続けています。「小川づくり」では、江別市の妹尾さんという方に石組みの仕方をならいしましたが、1年経つとエビやヤゴなどが戻ってきました。「湿原の復元」では、植物観察会のメンバーが中心になり



取り組みを進めました。当時の飯塚実行委員長を中心にして、種から育てて約 3,300 鉢くらいをつくって、水質浄化に適した植物や畜産糞尿などを浄化するための植物について実験をしました。「里山センター」も建設しました。これは、小学生が体験学習で訪れたときに雨宿りするところもない。そこで、町内で 500 円募金を呼びかけたところ、1 カ月半で予定していた額が集まり、セブンイレブン「緑の基金」からも 100 万円をもらって、320 万円で建てました。その他、町内外の方々の協力により、水車や炭焼き小屋もつくりました。多くの子供たちがハサンベツで自然とふれあい、田んぼ体験をしたり、生き物観察会をするなど、貴重な体験をしています。また、道職員の研修をはじめ多くの視察が全道から来ています。

川と里山

ハサンベツ川には落差工があったため、魚が上ってくることができませんでした。そこで、役場と協議して、実行委員会が手弁当で魚道をつくりました。半年経過して、ウグイの生息(群れ)が確認されました。川が環境が良くなるとより豊かな里山は形成できないと考えたためです。そして、私の後輩でもある北大の魚類分野の第一人者である専門家を招いて学習し、要するに海、川、森、土のそれぞれのつながりがなければ豊かな環境は

(2007.3.31 北海道栗山町まちづくり推進課)

形成されないということを学びました。余談ですが、夕張川にガンの仲間であるオオヒシクイという鳥がねぐらを取っています。全国で3箇所の川だけであり、中でも夕張川は最大のねぐらであるということが分かりました。これも貴重な財産の発見であったと思います。また、由仁町と協力して「夕張川下り」という流域をまたぐ取り組みをしましたが、よく考えると、一方で合併問題がありますが、隣町と連携して取り組んだ事業はとても珍しいものではなかったでしょうか。また南幌の清幌で地元小学生の参加で魚類の調査をしましたが、そこまではサケが上ってきていることも分かりました。さらには、ハサンベツ川に親水護岸をつくり、子供たちが川で遊べる様に、水辺のアプローチもつくりました。崩したコンクリートは廃棄物にするのではなく、そのまま再利用する形でつくりました。



道州制モデル事業「農村地域の小河川(用排水)の環境再生」

道内 6 箇所のモデル事業の一つがハサンベツ里山計画です。河川については、以前は治水と利水の考え方がありませんでしたが、現在では、計画の全ては環境に配慮すること、地域住民の意向を尊重して進めることがポイントとなります。国の流れとして、自然再生法を基本とする考え方があります。「開発」か「保護」かという考え方ではなく、自然環境に配慮した計画でなければ駄目な時代になってきていると認識しなければなりません。実行委員会としては、メンバーにも負荷のかかる大変な取り組みですが、道庁がハサンベツの取り組みを評価し、予算化してく

道州制モデル事業

- 農村地域の小河川(用排水)の環境再生にむけた取り組みの調査事業～全道6事例のひとつ
- 河川法・土地改良法改正・自然再生法
- 調査費17年度3千万円、18年度1千万円、19年度資料作成費(国費と道費が折半)
- 実際に地域住民が参加して事業展開しているところは栗山町のみ

れた事業です。この事業により「ふるさとの川再生・創生」と題して、ハサンベツ川の切り替え水路や護岸改修、魚の生息場所の形成、植林、土留めダム設置が計画的に行われています。また、先日、国から「立ち上がる農山漁村」の指定も受けました。環境省の里山調査地の中心となる全国6箇所の一つにも選ばれ、さらに日本を代表する魅力ある里山として、未来に引き継いでいくことが期待されています。

意見交換(自由議論)の要旨 (第2回)

農業と自然環境とは密接な関係があり、バブル期に、苫東から栗山地区まで森林伐採が進められ(ゴルフ場開発などにより)、農家は「やませ(風)」に常に悩まされてきた。近年の春先の強風とも関係が深いと感じている。異常気象と言われていることが、農家にとっては生活に直結するものであり、即効性の打開策はないと思うが、地道に自然保全に取り組むことが重要だと考える。

7年程、ホタルの里で有名な沼田町に行くことがあったが、地域の方のお話を聞くと、下の方で飛んでいるホタルが元来、地域に生息する「ヘイケボタル」、樹木の中から上を飛んでいるのは、岐阜県から採取してもって来た「ゲンジボタル」であったということ、今後は、ブラジルのホタルを持ってくるとの話もあった。それが本当の地域の自然環境保全かと疑念をいだいた。栗山町の取り組みは過去にあった自然の再生であり素晴らしい。

(高橋講師)過去にはホタルを観察するイベントに 1,500 人程が集まったことがあったが、その時には、野生のホタル 20 匹ほどしかいなく、本州から購入すれば良いという意見もあった。生息環境としては可能なことではあるが、

(2007.3.31 北海道栗山町まちづくり推進課)

自然保護の観点からはどう考えても間違っており、「観光」のための取り組みで終わってしまう。「地域文化」や教育につながっていかない問題となる。栗山町の取り組みは在来種を主題において生息環境を復元している。

(高橋講師) オオムラサキについても同様の議論があり、「クリヤマエンシス」という、町独自の亜種が生息している。道外から、チョウを持ってきて繁殖させても、地域特性が失われると思う。環境に応じて羽の文様や羽の裏の保護色も異なる。やはり、地域の生息環境に主題を置くことが重要。

自然と親しみ地域で生活するということは地域文化創造につながり、農業だけではなく様々な分野に究極はつながってくることである。本町の自然保護の取り組みは、昆虫マニアだけではなく、あらゆる分野の町民の皆さんと連携をして取り組んできたことが、住民運動として 20 年以上にわたり取り組んでこれた重要なポイントだと思う。

高橋氏の力があつたからこそ、20 年にわたる取り組みが進められたのか。

(高橋講師) 一緒に活動する様々な分野の方々いたからこそ、この取り組みが続いてきた。昆虫好きの一つの分野の人間だけでは住民運動につながらない。これは栗山町の住民の気質であつたと思われる。

高橋氏は学校事務職員という立場の中でここまで活動して来れたことは素晴らしい。ご自身としてはどのように感じているのか。

(高橋講師) 仕事をしながら活動を続けることに苦労は多いが、やはり様々な人の支えがあつて取り組みが続けられた。しかし、誰かが「自分がやろう」という強い思いを持つことが重要であり、その思いを持つことができれば、たいていのことは実現できるものと思う。現在、学校教育の現場では、子供たちに意欲を持ってもらおうという「生きる力」を養うというテーマに苦労している。しかし、一番重要なことは、今栗山に住む大人たちが自分たちで希望を持って地域で頑張る姿を見せることであると思う。それが地域で取り組める教育ではないだろうか。

高橋氏の行動力の源は何か。

(高橋講師) きつと、人は自然と共に生きていくしかないということであり、自然を保護するということは故郷をつくっているということだと思う。栗山から巣立っていく子供たちが「私たちのまちにはオオムラサキがいる」という単純な思いが一つのアイデンティティーにつながってくるものではないか。また、きわめて単純にあらゆることに「興味」を持つ力が重要ではないだろうか。ものごとは一つで成り立っていない。そして自然環境はあらゆることに繋がってくる。それが、私たちが 20 年以上かけて取り組んできたことの根底として、多様な分野の方々と連携して活動することにつながった。そして、そのネットワークづくりについて、行政の大きな役割があるのではないかと。



昆虫の生育環境(例えばチョウの分布が 93 種にもなること)や植物の生息環境に象徴される豊かな自然環境は、農業地域としても優れているということである。

20 年以上にわたる自然保護の取り組みは、栗山町の地域教育や生涯教育の観点で非常に重要な役割を果たしてきたといえる。

(議論のまとめ) 20 年以上に渡る「自然保護活動」から導き出されること

栗山町の自然環境保全の取り組みは、短期的な「観光開発」ではなく、地域の文化を守り愛する観点からの活動であり、地域の教育の現場、または生涯学習の観点からの実践フィールドとして認識することが重要。

20 年以上に渡る自然環境保全の取り組みから学ぶことは、町民の地域活動は一つ分野だけの縦割りではなく、あらゆる分野が連携をすることで実践力と継続力が高まっていくと考えられる。その横のネットワークづくりにおいては、特に行政としての役割が今後益々重要になってくる。

意欲を持ち「生きる力」を養うという次世代育成のために一番重要なことは、今栗山に住む大人たちが自分たちで希望を持って地域で頑張る姿を見せることである。そして、地域体験のきっかけとして、八サンベツ里山計画などの自然環境に触れる機会は非常に重要。